第二章　戦後広島県巡幸史

（昭和二十二年十二月五日～八日）

広島県巡幸概観

巡幸に込められた陛下の御決意

ああ広島平和の鐘も鳴りはじめたちなほる見えてうれしかりけり

この御歌は、今上陛下が昭和二十二年十二月五日～八日に亘る広島県巡幸の際に作られた御製である。この戦後の広島県巡幸が原爆、そして空襲によって壊滅的な被害を受けた広島、呉、福山市民をはじめとする未だ敗戦の混乱の中にあった全ての県民にとって、どれほどの希望と

復興への気力を呼び起こしたかは、本編の具体的な記録にも明かである。戦後巡幸こそ陛下の一貫した「民安かれ」との祈りの顕現したものであり、戦後日本の驚異的な復興の原動力となったものなのである。

陛下は、昭和二十一年二月の神奈川県から、昭和二十九年八月の北海道に至る九年間の戦後巡幸によって、全国一千四百十一ヶ所をまわられ親しく国民を励まされた。そこには、陛下の並々ならぬ御決意がうかがわれる。陛下の戦後巡幸へ込められたお気持ちを示すものとして、当時の加藤宮内次官が陛下から直々に次のようなお言葉をいただいたことを、最近明らかにしている。

「戦争を防止できず国民をこの災禍に陥らしめたことは誠にもうしわけない。この際、位を退くことも一つの責任の果し方であろうと思うけれども、私は方々から引き揚げて来た人、親しい者を失った人、困って居る人たちの所へ行って慰めてやり、又働く人は励ましてやって一日も早く日本を再興したい。このためにはどんな苦労をしてもかまわない。こう働くことが私の責任であって、祖先と国民とに対して責を果たすことになるのだと思う。……宮内官たちは、私の健康を心配するだろうが、自分はどんなことになってもやり抜くつもりであるから、健康とか何かは全く考えることなくやってほしい。宮内官はそのことを計画し、実行してほしい。」

この陛下の御決意があればこそ、九年間、総行程三万三千キロ、一千四百十一ヶ所に亘る全国巡幸は成し遂げられたのである。当初は、治安を心配する政府の強い反対があり、また後には、巡幸された陛下に対する国民のあまりの熱狂ぶりに恐れをなした占領軍の圧力によって、一年間の巡幸の中断という事態が起こった。しかし陛下の御決意と、陛下をぜひお迎えしたいという国民の熱望がそれらを乗り越えていったのである。

長崎で原爆に倒れ、〝長崎の鐘〟で有名な永井隆博士は、長崎県巡幸の際に陛下のお見舞いを受け、こんな感想を語っている。

「私はあの細やかな心遣ひをして、どんな小さなものでもいたわられる愛情の御態度こそ、今日本人が毎日の生活にまねをしなくてはならない思う。今日本人は、お互いに分離しているが、陛下がお歩きになると、そのあとに万葉の古い時代にあったなごやかな愛情の一致がよみがえって日本人が再び結びつく。今日は実にうれしかった。」

永井博士の言葉にあるように、多くの国民は戦後巡幸を通して陛下の御決意、御愛を身を以

って感じ取ればこそ、感激し、貧困と絶望の底から、希望と勇気をもって立ち上がっていったのではなかろうか。

昭和二十一年十月三十一日、次の三首の御歌が東京の各新聞に発表されている。

戦災地視察

戦のわざはひうけし国民をおもふ心にいでたちて来ぬ
わざわひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ
国をおこすもとゐとみえてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

広島県行幸への県民の願い

広島県は、陛下が皇太子当時の大正十五年に行啓され、また御祖父明治天皇が日清戦争時、大本営を置かれたように、皇室とは歴史的に関係の深い土地柄である。

戦後まもなく、広島市民を中心に誰とはなく、原爆を受けた広島、新しい建設にいそしみ励んでいる広島をぜひとも天皇陛下に見ていただきたいとの声が起ってきた。その声は昭和二十二年五月、広島市役所に於いて第一回平和祭に向けての会合が行なわれた際に表面化した。会合の中で当時の中村藤太郎広島商工会議所会頭が緊急提言として「八月六日の平和祭に、ぜひ天皇陛下の御臨席をお願いしよう。」と発言した。一瞬、会議室は息をのんだ。しかし間をおかず満場の拍手……。全会一致の決議となった。市長浜井信三、商工会議所会頭中村藤太郎の両氏はさっそく県庁を訪ね、その打ち合わせを行った。楠瀬常猪県知事も同意し、すみやかに上京して宮内府へお願いに上ったのであった。

まもなく宮内府より、「八月六日の平和祭へ行幸されることは御都合で出来かねるが、適当な機会に広島県民の願いをお聞きとどけ願うよう取りはこぶ。」との回答があった。広島県民はあたかも永い間別れていた父の帰りを持つような気持ちで待ちこがれた。そして、涼しい秋風がふきそめた九月、宮内府より中国地方巡幸の内報が伝わった。時期は十一月下旬から十二月上旬の予定、もちろん広島県へもお立ち寄りになる。広島県行幸の願いが叶えられた県民は歓喜した。広島県では、同年十月議会において、「天皇陛下広島県行幸懇願について」と題する次のような発議書を上程決議し、県民の熱誠を上表した。

発　議　書

天皇陛下広島県行幸懇請について

今上陛下に於かせられましては今秋、中国地方に親しく御視察のため、行幸の御予定あるやに仄聞するのでありますが、吾が広島県は戦時原子爆弾を受けた広島市、戦火のため灰にきした呉市、福山市等の都市を有し、その後の動きは、世界各国の注目の的になって居り、その復興のあり方も他府県に比して著しき特異性をもっているのであります。

文化経済、政治教育等の面においても独自のものがありユートピア広島県の再出発への姿こそ御視察賜わるに足る好個の存在でありますし、同時に二百万県民は絶えて久しき行幸を衷心より渇望して居りますので、希くば県内隈なく行幸あらせられますよう懇請申し上ぐる次第であります。広島県会におきましては、右広島県下行幸を満場一致懇請することに決議いたしますので宜しく御執成下さるようお願い申し上げます。

昭和二十二年十月四日

以後、県庁も市役所も県民も、その日を迎える準備に身も心も楽しく忙しい日々に入ったのである。

行幸を心待ちにする県民の声

陛下の広島県行幸を目前に、それを心待ちにする県民の喜びの声を当時の中国新聞から拾ってみる。

某小学校教員

「戦災地に民主天皇として乗り出して来られることは、復興熱をいやが上にも高めることと思います。」

広島市仁保町では、野良仕事中の七十一才だという一老婆は、明治天皇の大本営行幸当時を思

い出しながら

「時代が変わり、平和な気持ちでお迎えできるわけで、私も長生きしたかいがありました。原爆にみまわれた広島の地に立れ、陛下が何と思われるかと思うと胸が一杯になります。ひと目でいいから拝みにいきたいと思います。」

広島駅前で復員軍人風の青年に問いかけると

「自分は無職です。日々の生活に追われて苦しんでいますが、これが陛下のせいなどとは、もう頭考えてはおりません。僕は行幸当日、心から親に子供があやまるような気持ちであやまりたいと思います。」

（以上、昭和二十二年十一月十八日号より）

二人の幼な子をかかえた戦災未亡人の手記

「〝あさってだね！ねえ母ちゃん〟ゆうべこたつのつどい——姉ちゃんが持ち出した天皇陛下

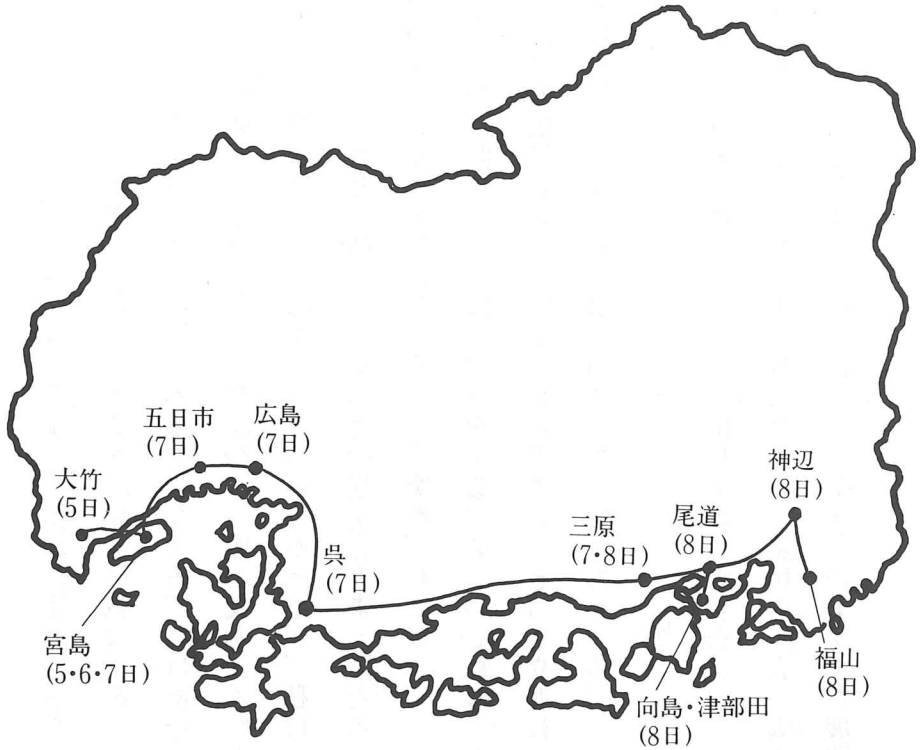
の御写真を囲み、坊やのおしゃべりはつきない。私は針仕事の手を止る。まあ、なんと明るい家庭！幸福で一杯な私の口から、ふとこう洩れる。戦に父を失った二人の子を汗と涙で育てて来たが、はやいつとせ。いばらの道にたたずみ、私は歯をくいしばり、父慕う子の泣く声をいくたび聞いたろう。だが、今坊やは〝僕の父ちゃん〟と陛下をゆびさし、誇らかに叫ぶ。私は胸つまり、なんにも答えてやれなかったが、私はいくたびか「父としての陛下」を口にしたけれど、坊やの言葉ほどの切実さがあっただろうか。もう大丈夫！私の苦労が二つの魂として実を結んでゆく。——突然。〝ねえ母ちゃん、お迎えにいこうね。〟私は坊やを抱きしめ、涙ながらにほおずりをする。あさって私は二人の手をかたく取り、陛下をお迎えに御幸橋に行こう。〝陛下ごらん下さい。きっと立派に育ててゆきます。〟〝あさってだからね！母ちゃん〟坊やはしつこくきいて待ちわびる。」

（昭和二十二年十二月五日号より）

そしていよいよ十二月五日午後三時、陛下は山口県から大竹市にお入りになった。広島県へ第一歩をしるされたのである。以後、十二月八日まで、県民の一人一人を慰められる陛下と、陛下をお慕いし、心を込めてお迎えする二百万広島県民とのドラマが展開されたのである。

広島県巡幸行程表

昭和22年12月5日～8日



広島県行幸日程

十二月五日

時刻	巡幸場所
一四、三七	（山口県東小学校）
一五、〇一	国立大竹病院
一五、二一	
一五、二六	三菱化成工業株式会社
一六、〇三	大竹工場
一六、〇八	
一六、一〇	大竹駅
一六、三三	宮島口駅
一六、三八	宮島口桟橋
一六、五一	
一六、五三	宮島桟橋
一六、五八	岩惣旅館（行在所）

十二月六日　御休養

十二月七日

九、〇〇	岩惣旅館（行在所）
九、〇五	宮島桟橋
九、二〇	宮島口桟橋
九、五五	戦災児育成所御視察
一〇、一〇	広島県水産試験場
一〇、三〇	広島市民奉迎場
一〇、三五	
一〇、三八	恩賜財団同胞援護会広島県支部
一〇、五三	第一総合授産共同作業場
一〇、五九	広島市立　袋町小学校
一一、一四	第五中学校
一一、一七	
一一、三二	広島県立広島第一中学校
一一、三五	
一二、〇三	広島市役所
一二、一五	
一三、一四	広島県庁
一三、二五	
一三、三〇	広島駅
一四、一二	
一四、一四	呉　駅
一四、一七	
一四、三五	呉市役所
一四、四〇	
一四、四五	呉市民奉迎場（二河公園）
一四、五〇	
一四、五二	呉　駅
一六、四〇	三原駅
一六、四五	浮城分室（行在所）

十二月八日

九、〇〇	浮城分室（行在所）
九、〇五	帝国人絹絲株式会社 三原工場
九、二〇	
九、二五	東洋繊維株式会社三原工場
九、四五	
九、四九	三菱重工業株式会社 三原車両製作所
一〇、〇四	
一〇、二九	尾道市戦災引揚者 応急公共住宅
一〇、三九	
一〇、四三	尾道駅前桟橋
一一、一三	
一一、二三	向島西村津部田
一一、五六	尾道中央桟橋
一二、〇〇	尾道市役所
一二、五〇	
一二、五七	尾道駅
一三、〇〇	
一三、二八	福山駅
一三、三〇	
一三、五八	神辺小学校
一四、二〇	
一四、四四	福山市 救護院 母子寮
一四、五四	
一四、五七	福山城址公園
一五、一四	
一五、一八	福山駅
一五、二〇	

大竹市・宮島町